東北プログラム報告書

政治学科　アクティブ・ラーニング

2018 年 1 月 10 日

大東文化大学法学部政治学科

はじめに

2017 年 9 月 28 日（木）～30 日（土）の間、アクティブ・ラーニング「東北プログラム」を実施した。政治学科の学生有志 13 名、引率教員 3 名、職員 1 名の 17 名が当該プログラムに参加した。東日本大震災から 6 年が経過し記憶の風化が進んでいるが、実際に被災地に足を運び、そこから震災復興や防災への教訓を学ぶという趣旨により、福島民友社様や河北新報社様のご協力のもとで実施した。参加者一同、現地でしか聞けないこと、見ることができないことを数多く学び、非常に充実したプログラムとなった。

このプログラムが開催されることになったきっかけは、2016 年 10 月に開催された国際比較政治研究所主催によるシンポジウム『震災後五年～伝えられていること・いないこと』である。そこでは、震災でご苦労をされた方、震災を伝えたメディアの方、行政として関われた方等を講演者としてお呼びし、震災のことについてご講演を頂いたが、その中で「福島のことをしっかりと理解してもらうことが難しい状況になっている」、「震災を我が事と捉えて、同じ犠牲を繰り返さないように備えてほしい」、「一度被災地を見て感じてほしい」といったことが述べられ、これらの言葉が聴講者に強烈なインパクトを与えるものとなった。東北から離れた首都圏ではオリンピックへ向けた機運が高まりつつあり東日本大震災は忘れ去られようとしているが、講演で述べられた言葉の一つ一つは重く、その場で聴いて終わりというものではなく、必ずや東北に足を運ぶ必要があると強く感じさせられる機会となった。

講演後の懇親会では東北に足を運ぶ話で盛り上がり、その方向で検討を進めることにした。そして、2017 年 2 月に仙台、東松島の現地視察を行い、河北新報社様、福島民友社様を訪問し、アクティブ・ラーニングへの具体的なご協力のお願いした。両社ともその場で快くお返事を頂き、「東北プログラム」を実現できる可能性が高まっていった。

このことを踏まえ、さっそく 2017 年度のプログラムの中に「東北プログラム」を入れるように検討を行い、当初は福島、宮城、東松島、の 3 つのプログラムを用意して学生の応募を待った。しかし、それぞれのプログラムへの参加者が思いのほか伸びず、検討の結果、福島と宮城を 1 つに纏めて実施することにした。その後、様々な調整を経た結果、福島は 1 日で福島第一原子力発電所内の視察を、宮城は 2 日で被災地をめぐり現地で被災者から話を聴くという形で実施することにした。2 泊 3 日で福島と宮城を回るのは非常にタイトなスケジュールであったが、福島民友社様、河北新報社様のコーディネートにより、中身の濃い内容にして頂け、参加した学生は被災地で接した方々から多くのことを学ぶことになった。そして、プログラムの終わりには、参加者全員がもう一度参加したいと思える内容となった。

この報告書は、学生が今回の「東北プログラム」を通じて学んだこと、それを今後の人生にどのように活かしていくのか、について纏めたものである。普段学ぶ大学の講義教室を出て、何を学んだのかをここに報告したい。

最後に、今回の東北プログラムにご協力を頂いた福島民友社様、河北新報社様には、この場を借りてお礼を申し上げたい。今後も政治学科のアクティブ・ラーニングの運営にご協力頂けるとあり難く思っている。

法学部政治学科　教員

武田知己、中根一貴、藤井誠一郎

スケジュール

9 月 28 日(木)

8:45　郡山駅西口　１階玄関前に集合
9:05　バス出発　磐越道を経由し、いわき中央ＩＣへ
10:50　いわき中央ＩＣ→四倉ＰＡで休憩→津波被災地（四倉）・久之浜・広野町など視察→Ｊビレッジ→楢葉町天神岬展望台
12:20　さくらモールとみおか　バス内で昼食予定
13:00　旧エネルギー館　構内視察
13:50　帰宅困難地区を回りながら原発へ
16:00　旧エネルギー館での質疑応答　＊時間により省略します。
18:40　郡山駅西口・高速バス乗り場
21:00　仙台駅着　　ユニゾイン仙台　チェックイン、夕食

9 月 29 日(金)

8:10　同ホテルのロビーに集合・移動開始
8:20　河北新報社駐車場着
8:30　出発
9:00　荒浜小着　　震災遺構学校視察→慰霊碑・深沼視察
9:50　荒浜小発
10:00　専能寺着　　語り部❶（次世代塾講師）
10:40　専能寺発　　三陸道経由
11:30　石巻・日和山着　市街地一望
11:50　石巻・日和山発　南浜・門脇地区経由→渡波経由

12:30　女川着　　語り部❷　→　プロムナード・昼食
14:20　女川発　　雄勝経由
15:00　大川小着　　遺構視察　→　語り部❸（次世代塾講師）
16:00　大川小発
16:30　南三陸戸倉着　　戸倉中跡地→戸倉小避難地
17:10　南三陸戸倉発　　災害対策庁舎→さんさん商店街経由
17:30　南三陸寄木着　　さとうみファーム視察、グループワーク、夕食
19:30　ファーム発
20:00　歌津平成の森着　チェックイン

9月30日(土)

8:30　歌津宿泊地（歌津平成の森）発
9:30　気仙沼波路上着　慰霊碑→気仙沼向洋高遺構見学語り部❹
11:00　気仙沼波路上発
12:00　唐桑つなかん着　戻り鰹昼食兼おかみの講話
13:20　つなかん発
13:40　陸前高田着　　語り部❺
15:00　陸前高田発　　気仙沼→金成若柳→東北道経由
17:30　仙台駅着

福島民友
みんゆうNet
平成29年度社会貢献フォーラム
「地域が支える子どもの未来～スポーツとあそびで育む心と絆～」
AJCSC 全日本社会貢献団体機構
社会貢献フォーラム in 札幌はこちら

▼ＮＩＥに関する記事 【NIE】

学生が廃炉現場を視察　大東文化大の有志、東電復興本社で意見

2017年09月30日

いいね！0 シェア ツイート B! 0 G+

石崎顧問（左）に質問する大東文化大の学生ら

東日本大震災の復興政策を学ぶ大東文化大法学部政治学科の学生有志が２８日、福島民友新聞社のコーディネートで東京電力福島第１原発（大熊、双葉町）の廃炉の現場や浜通りの被災地を視察した。

参加したのは、学生１１人と武田知己教授（伊達市出身）ら教職員４人。福島第１原発では、汚染水対策で巨大なタンクが林立する様子や、使用済み核燃料取り出しに向けて準備が進む原子炉建屋の現状を車内から視察。続いて、東電の福島復興本社（富岡町）で石崎芳行福島担当特別顧問（前副社長）らとの意見交換に臨んだ。

三春町出身で復興について研究してきた近内大輔さん（２１）は、復興本社の果たすべき役割について質問。石崎氏は「東電は地域のコミュニティーを一瞬で壊してしまった。全く元には戻らないが、だからこそ、もっと良い地域にするのが復興であり、それが果たされるまで復興本社の仕事はなくならない」と語った。

さいたま市の学生からは「廃炉の状況や東電への復興への取り組みを関東の人が知らないのは、東電の広報が悪いか、報道に課題があるのではないか」という指摘もあった。

一行は、Ｊヴィレッジ（楢葉、広野町）の改修現場や楢葉、富岡両町の復興拠点なども視察した。

学生有志は被災地の復興政策を学ぶため学年を越えて集まったメンバーで、半年にわたって多角的に学んだ後、現場でなければ分からない状況をつかむため視察に参加。本県での視察については福島民友新聞社が助言と案内を担った。

出典：福島民友社の HP
http://www.minyu-net.com/nie/news/FM20170930-208262.php

宮城のニュース

宮城　社会　３．１１大震災

ツイート　シェア

遺族の声　学生「重く響いた」　大東文化大生が宮城の被災地巡る

旧荒浜小を案内する担当職員（右）の話を聞き、津波の痕跡を確かめる学生ら＝仙台市若林区

拡大写真

東日本大震災の犠牲に向き合い、防災の教訓を確かめようと、大東文化大法学部（東京）の学生と教職員１７人が２９日、宮城県内の被災地を巡った。河北新報社などが運営する震災講座「３１１『伝える／備える』次世代塾」講師の被災遺族らから話を聴き、６年半前の出来事を胸に刻んだ。

２９日は仙台市が震災遺構として公開している若林区の旧荒浜小を訪問。校舎２階まで津波が押し寄せた跡を確かめた後、児童や地域住民が避難した屋上に上り、津波の威力と迅速な避難の大切さを学んだ。

石巻市や女川町、南三陸町を巡り、児童と教職員計８４人が死亡、行方不明になった石巻市大川小で、６年生だった次女＝当時（１２）＝を亡くした佐藤敏郎さん（５４）から話を聴いた。

「子どもたちの命を守り、輝かせるのが学校。同じ犠牲を絶対に繰り返してはならない」という訴えに、法学部３年の広瀬碧海（たくみ）さん（２１）は「教員志望でもあり、重く響いた。現場で学んだことを今後に生かしたい」と語った。

１泊２日の行程で、学生らは３０日、校舎４階まで津波が達した気仙沼向洋高（気仙沼市）の旧校舎や陸前高田市などを訪ねる。

同大法学部政治学科は本年度、現地視察講座を創設し、テーマの一つとして震災を選定。河北新報社が首都圏の学生に震災を伝承する機会と位置付け、「次世代塾」運営の一環として企画運営に協力した。

関連ページ：宮城　社会　３．１１大震災

2017年09月30日土曜日

出典：河北新報社の HP

http://www.kahoku.co.jp/tohokunews/201709/20170930_13024.html

『福島第１原子力発電所』

法学部政治学科３年 廣瀬碧海

まず私たちは、昭和 63 年に PR 館として建てられた旧エネルギー館へと案内された。旧エネルギー館は、原発事故以前は原発を PR する目的で建てられたが原発事故後は廃炉作業の進む福島第１原発へ訪れる人々の受け入れ施設へと役割を変えた建物である。旧エネルギー館では、現在の原発の状況と事故後の詳細を担当者から説明を受けた。印象的だったのは、冒頭原発に入り現地を見るために訪れた私たちに対する感謝と事故発生に対する謝罪を入れていたことである。専門的な廃炉へのプロセスとそれを阻む現在抱えている問題について一通り説明を受けたのち、東京電力のバスでいよいよ原発へと向かった。

現在原発へ入れる道は、国道６号のみであり側道への侵入もバリケードにより封鎖されている。国道６号に入るとそこには６年前から時が止まった街が広がっていた。原発事故後帰還困難区域に設定されたため事故後３年間そのまま放置され現在も道路の通行のみ許可されているためほぼ放置されている状態である。まさに「時が止まった街」であった。

国道６号から原発方向へ側道に入ると警察による通行確認が入った。通行確認を行う警察も福島県警ではなく全国から集められた各県の支援部隊だそうだ。また、通行確認も２箇所設けられ厳重な警備がなされていた。原発に着くとまず真新しい新事務棟が見えた。正直かなり綺麗な建物であった。入退域管理施設で身分証等のチェックを受けいよいよ原発内に入った。原発内は、震災前の緑の多い原発というイメージはなく様々な機材が置かれ工事現場となっていた。ちなみに震災前にあった桜の木などは事故後、廃炉作業の邪魔になってしまうという理由から切られてしまい現在はほぼ残っていないそうだ。旧エネルギー館で説明を受けた凍土壁の設備や廃炉作業に伴って増えていった汚染水を保管するタンクなどの説明を受けながらバスで４号機から順に見学し原発構内を一周する形で視察を終えた。なお、福島第一原発では作業服を一度使用したら廃棄処分をするため１日の作業で多くの作業服の処分が必要となる。この作業服は、一般では処理できないため構内に焼却場などの建設が予定されている。

原発視察を終えて個人的に東京電力や協力企業の作業員の方など多くの方々が原発の廃炉という共通目標のために尽力している事を感じた。構内のポスターには未来に向けて頑張ろうといったスローガンが掲げられていた。原発事故を起こしたという大きな十字架を東京電力は背負い、福島県民とりわけ地域住民に大きな傷を負わせた責任は計り知れないものではないし、そういったものは簡単に許されるものではない。しかし、今も原発の中では危険な場所へ入り廃炉に向けて作業をしている人々がいることは事実である。私は、一福島県民として構内で作業する方々へ敬意と感謝はしなければならないと原発視察を通して感じた。

『原発構内視察』

政治学科 3 年　近内大輔

私たちは福島県富岡町の東京電力旧エネルギー館に到着後、本人確認などを行い、原発の概要に関するビデオを視聴した。多くの東電職員の方が出迎えてくれたこと、とても手厚い対応をしてくれたことが印象に残っている。その後、バスで帰宅困難地域を通って原発構内への入退去を管理する建物に移動。金属探知機やパスワードによるチェックを行った。非常に管理が徹底しており、職員も多かったため、少し緊張した。そしてポケット線量計を一人ずつ身に着け、構内専用のバスに乗車し、原発構内視察が始まった。

構内専用バスに乗車し、東電の方の説明を受けながら回っていくという形で、およそ 1 時間程度の視察であった。構内には約 80 か所に線量計が設置されており、いつでも線量を確認できるようになっていた。構内の駐車場にはナンバープレートのついていない車が多く見られた。そういった車は放射線量が高いことから構内のみで使用可能とした車であるという説明を受けた。800 台ほどあるらしいが、外には持ち出せないため、修理を行う施設を構内に完備しているとのことであった。構内の設備の充実さが理解できるのと同時に、そういった所にまで配慮しなければならないという現実が見えた。原子炉建屋に近づいている途中には遮水壁という汚染水対策のための大きく長い管と井戸があり、その仕組みについて説明を受けた。汚染水を流出させないために地下を凍結させているという説明であったが、全く想像ができず最先端の技術力にただただ驚いた。そして、バスは原子炉建屋付近で停車した。テレビで見ていたあの原子炉建屋が目の前にある。理解し難い光景であった。「これ」が福島県の多くの人々のことを、これまでそしてこれから何十年先も苦しめる主要因だと改めて考えると、言葉することが出来なかった。特に、構内で衝撃的だったのが海側に置かれていたタンクである。凄まじく変形しており、当時の津波の甚大さが連想された。原発構内には、至る所に震災の爪痕が残されており、震災の被害の大きさを今でも物語っていた。

福島第一原子力発電所は 1 号機から 4 号機までは大熊町､5 号機と 6 号機は双葉町に位置している。現在、1 号機から 3 号機までは冷温停止状態を維持しており、使用済み燃料や燃料デブリを取り出す作業に向けた試みなどが実施されている。4 号機については使用済み燃料プール内にあった燃料全てを取り出すことに成功し、この経験を他の建屋の作業に活用していくとのことである。5 号機と 6 号機については震災当時定期検査で停止中であったために大きな事故はなく、廃炉が決まり、使用済み燃料を保管中とのことであった。私たちの視察中も、原子炉建屋付近で作業員の方々が実際に作業していた。原子炉建屋付近の作業員の方たちは放射線防護服を完全装備していたが、敷地内全体で見ると現在 95%が一般作業服での作業が可能となっている。地表面をアスファルトで覆い、ガレキなどを撤去したことによって、着実に放射線量が低下してきているからである。また、大型の休憩所など作業員の労働環境も整備され、以前より負担が軽減されてきているという。しかし、このような内容はニュースや新聞などメディアであまり報じられていなかったため、今回の構内視察で知ることとなった。東電とメディアはもっと連携して行く必要があるのではないだろうか。そして、原発構内をルート通りに回り、入退去を管理する建物に到着。最後に、今回の視察における身体のスクリーニング検査を行い、問題なく原発構内視察を終えた。

今回の福島第一原発構内視察では自分にとって非常に意味のある貴重な経験ができた。そしてこれまでいかに自分が原発について無知で何も考えていなかったのかを思い知ることとなった。今回の原発視察をきっかけに、福島原発の動向に目を向け、福島原発と福島の復興についての考えを深めていきたいと思う。

『東電福島復興本社での石崎氏からの話』

政治学科３年 近内大輔

私たちは福島原発視察後、富岡町の福島復興本社に移動。東京電力ホールディングス株式会社、福島担当特別顧問の石崎芳行氏から福島復興本社の取り組みについての説明を受け、質疑応答の時間が設けられた。

石崎氏の話では、福島復興本社設立の背景や目的、組織体制についての説明、具体的な復興推進活動や除染活動の詳細などの説明を受けた。風評被害払拭への取り組みや雇用創出への取り組みなどにも福島復興本社は尽力しているとのことであった。特に印象的だったのは、地域の特性・状況に応じたまちづくり等への貢献として精力的に活動していることである。原発事故を引き起こした東電は原発の廃炉作業だけではなく、福島県の被災した地域における復興を目指しており、その責任を果たすべく、被災した方々に少しでも寄り添って活動をしているということが理解できた。また、米国などを訪問し、福島復興の取り組みなどを国際的に伝える活動もしているとのことである。

質疑応答では、石崎氏からの説明を受け、私は二つほど質問した。

私「福島復興本社では廃炉作業以外の面での復興に尽力しているとのことだったが、どこまでやれば、いつまでやれば、福島がどのような状況になったら復興したと考えるのか。また、復興が果たせたという状況になったら福島復興本社はどうなるのか。」

石崎氏「福島復興本社としての復興に向けた取り組みは半永久的に続いていく。あの事故で地域コミュニティや人と人の繋がり、部落(行政区)というものを壊してしまったことが最大の問題であり、残念ながらそれは元通りに戻る日はほぼ確実に来ない。そのため、元に戻すのではなく、元あった町よりも更に良い町をつくっていくことを目指さなければならない。そこで、その地域に戻ってきた人々を確保し、その人々が住みやすいようサポートをする。更に、新たに住もうと思ってくれるような転入者を引き込み、新たな地域のコミュニティを形成し、町づくりしていこうと考えている。そのための復興活動をしていかなければならないし、それは廃炉作業よりも困難なことであるので、このような復興への取り組みは福島復興本社としてずっと続けていくつもり。」

私「2020 年に復興五輪という名目で、東京そして被災地を会場として東京五輪が開催される予定だが、未だ復興したとは言い難く、東京五輪にお金や時間など使っている状況ではないと考えている方々も多くおられると思うが、それに関してどう考えているのか。」

石崎氏「被災地開催や復興五輪については前向きに考えている。地域の人々や企業が活性化することによって、福島が活性化し、それが結果的に復興にも繋がっていくのではないだろうか。ある方（広野町在住、NPO 法人理事長、西本由美子さん」）は地元高校生の提案をきっかけに、多くの方々を巻き込んで海沿いを走る国道 6 号線や県道およそ 160 ㎞に 20000 本の桜を植えようと現在活動している（ふくしま浜街道・桜プロジェクト）。そして、五輪の聖火リレーでその街道を走ることが決まり、全国からボラティアや著名人が駆けつけ、地域が活性化したという事例もある。結果的に、この事例からも五輪が開催されることによって、地域が活性化したと言えるのではないだろうか。五輪開催は復興推進にも繋がっている。協力していく方針である。」

このように、石崎氏は私の目を見て真摯に真っ直ぐ答えてくれた。東電職員として、福島の復興を果たすという熱い思いが心から伝わる質疑応答の時間であった。

今回、このような形で東電の元副社長でもあった石崎氏の話を直に伺うことができ、非常に有意義な時間となった。真摯に真っ直ぐ答えてくださった石崎氏の姿が非常に印象に残っている。石崎氏の話から、福島復興本社を軸とした東電による復興へ向けた様々な取り組みが実施されていることは新たに理解できた。しかし、二年生の千葉君からの意見にもあったように、東電による復興への取り組みや実態が日本全国に発信されていない、出来ていないのが現状である。福島復興本社として、復興への取り組みを日本全国各地に発信していくことが今後の重要な課題の一つではないかと考えられる。

『東京電力福島復興本社』

政治学科２年　北村　浩也

◯東京電力福島復興本社の役割とその活動

（↑福島復興本社）

2013 年 1 月に設置された福島復興本社(以下：復興本社)では、原子力事故で被災された方への賠償、除染、復興推進活動など廃炉作業以外での責任を果たす役割を担っている。

そんな復興本社が行ってきた今までの活動は、一時帰宅後のスクリーニング作業や地元住民の引っ越し作業の手伝い、草刈り、東電社員２人１組での見守り活動など、地域に密着した地道な活動である。それらの活動をする際に１つ大きな特徴がある。それは、東電の制服を着用して活動する点だ。東電の社員だと一目でわかる制服の着用に、「地元住民から何を言われるか分らない」などの理由で嫌悪感を示した社員が少なくなかったと言うが「会社が起こしたことに責任を持つ」という意味で石崎氏は、制服着用を義務付けた。そんな活動を継続していく中で「東電は許せないが社員個人は信頼できる。」と言った地域の方々の声も少しずつ聞こえてきたという。

◯復興本社の展望

「復興本社の仕事はいつまで続くのか」という学生からの質問に対し石崎氏は「半永久的に続けなければならない。」と答えた。それと同時に「では、いつになったら復興を果たせるのか」について、まちづくりの観点から、あくまで石崎氏個人の見解としながらも「今回の原発事故の一番の罪は、三世代同居が当たり前だったこの地域のコミュニティーを一瞬にして壊してしまったこと。そして、それは残念ながらもう二度と元に戻らないと覚悟している。」と言いつつも、「では元に戻らないならば、元あった“まち”を元よりもっと良い“まち”にしよう。」という発想のもと、「元々いる地域の方々と我々のような“よそ者”と呼ばれる転入者が一緒になって、みんなが再び笑って暮らせるまちづくりを、国や町そして地域の方々と協力して目指していく。しかし、それには長い時間がかかる。だから、復興本社の仕事は半永久的に続けなければならない。」と、改めて原発事故がもたらした、大きすぎる罪を深く反省しつつ、その責任を全うするために、今後も復興本社が地域の方々のためにできること、やらなければならないことを力強く、じっと将来を見つめ、時に目を輝かせながら、今後の展望を私たちに一行に熱く語ってくれた。

「東電＝悪」と断罪することは簡単であるが、地震と津波、原発事故から６年半以上がたった現場には、地域の人と東電社員の交わりや地道な活動と、地域再生への熱い思いがあった。人の思いこそが、今日より少しでもいい明日、いい未来を築いていくのだと私は信じ、東京電力福島復興本社特別顧問、石崎芳行氏のお話しを聞いての報告とする。

『荒浜小学校』

政治学科１年　猪俣　友徳

震災遺構「仙台市立荒浜小学校」は、仙台駅から車で４０分ほどの所にある。バスを降りて周りを見渡しても、目の前の白くて大きな校舎以外は他に建築物がなかった。しかし、ここにはかつて 2000 人、800 世帯が住む集落があったそうだ。荒浜小学校の約 700 メートル先には海岸があり、松の木が疎らに生えているものの、4 階建ての校舎から海がよく見える。震災当時は、地上から約 4.6 メートルの津波に襲われ、2 階の床上 40 センチの高さまで浸水した。波の衝撃を受けた校舎東側のベランダの鉄製とコンクリートのフェンスは、無惨な状態となっていた。結局、津波は荒浜小学校で止まることは無く、約 3 キロ先の盛土されていた仙台東部道路に至るまで町を飲み込んでいった。

↑津波の到達位置を示す看板

↑津波の衝撃受けた校舎東側

4 階展示室「3. 11 荒浜の記憶」では、地震発生から 27 時間後の避難者全員救出までをまとめた映像を見ることができた。当時の校長・副校長先生や町内会長の方などへのインタビュー、消防ヘリからとられた当時の惨憺たる映像を見て、自然の猛威に背筋が凍る思いだった。また、同じく 4 階にある展示室「荒浜の歴史と文化/荒浜小学校の思い出」では、津波で失われた荒浜地区を地域の方々の記憶を頼りに、屋根の色まで精巧に再現した大きなジオラマが部屋の中央に展示されていた。案内人の方の話によると、もともとこの地域に住んでいた方は集団移転することが決まっており、残ったこの土地にはこれから多くの事業者が入ってくる予定とのことだ。当時、東宮城野小学校の校舎を間借りすることになった 91 名の児童や、思い出深い土地を津波によって奪われた地域の方々の事に思いを馳せ、ひどく憂愁を感じた。

↑震災前を再現したジオラマ

↑黒板に書かれた感謝と励ましのメッセージ

『荒浜小学校』

政治学科２年　綱島　健

私たちは 2 日目に荒浜小学校を視察した。この荒浜小学校は東日本大震災の際、児童や教職員、地域住民ら 320 人が避難し、2 階まで津波が押し寄せた場所である。当時は体育館も避難場所だったが、校長先生の判断で屋上に変更していた。よって校舎にたどり着いた人たちは助かった。そして現在は震災遺構となり、当時の写真や映像などの展示がされている。

この震災遺構になった荒浜小を視察した中で、特に印象に残った展示がある。それは、地域の住民の記憶を頼りに作られた震災以前のその地域の模型である。この展示が印象に残った理由は、その模型に現在の荒浜小周辺では想像もできないほどたくさんの建物があったことだ。展示を見る前に、語り部の方が「見渡す限り民家があった」と教えてくださったが、目の前の荒浜小のある地域には民家が１軒もないどころか建物すら全くないという状況であったため、少し誇張して言っているのではないかと思った。しかし実際に模型で確認すると自分が考えていたよりも遥かに多くの民家があり、語り部の方が言った通りの見渡す限りの建物があったのだとわかり、自分の津波の被害に対する認識の甘さを痛感した。また、この地域は災害危険地域に指定されたため居住できなくなったため、記憶を頼りに模型を作ったその地域の方々も散り散りになってしまっていた。このような震災の数字で示されない被害の大きさや深さも知ることができたので、この模型の展示はとても印象に残った。

↑（震災以前の地域の模型の展示）

↑（視察当時の同じ方角の景色）

最後に荒浜小の視察全体をとおして、災害危険区域に指定され視察当時荒浜小の他に建物がない状況であったことなどから、信じられない程大きな災害があったのだということが一目で分かるほど衝撃的な場所だった。そして、人が住めなくなったこの地域で今後どのような事業が進められていくのかなど多くの課題が残る地域でもあり、復興は未だに終わっていないのだとよく分かる場所だとも感じた。

『専能寺』

政治学科３年　林　加奈恵

今から約 6 年前、東北地方を襲った東北地方太平洋沖地震。これによる被害は莫大なものとなり、人々に大きな悲しみを与えた。

この東日本大震災において、宮城県仙台市宮城野区蒲生地区の南部の集落にある専能寺も、大きな被害を受けたうちのひとつだ。専能寺に到達した波の高さは、床上約 1.5ｍで、山門は津波で約１㎞内陸へ流された。波が引くと、運ばれたがれきや自動車が、境内や本堂を覆い尽くし、750 基あった墓石の多くが倒壊した。

専能寺は、海岸から内陸に約 2 ㎞で、そう遠くはなく、地図から見ても、津波の心配をしてしまう程の場所に位置していた。しかし、専能寺の住職の足利さんは、震災当時、「津波はここまで到達しない」と考えていた。それはなぜかというと、東北地方太平洋沖地震より前に起きたチリ地震では、津波は専能寺に到達していなかったからだ。チリ地震の際、専能寺の位置する地区に、避難指示が出たが、津波は到達しなかった。この経験のせいで、東日本大震災の際に津波警報が出ても、“津波は来ないから大丈夫だろう”と思い込んでしまい、結果、予想外の事態となってしまった。以前の経験がどうであれ、どんな時でも、万が一のことが起きてしまうかもしれないという心構えは必要なのだ。

震災直後、無残な寺の姿に、足利さんは打ちのめされた。しかし全国から助けに来た僧侶の、「地域の復興はお寺からですよ」という言葉に背中を押され、境内のがれき撤去や、墓石の復旧から取り組み始めた。さらに復旧作業だけではなく、津波で犠牲になった信徒を弔うため、葬祭会館や、火葬場を回り、読経する日々が続いた。

足利さんは、この「東日本大震災をどう伝えていくべきか」が、重要な課題であり、津波被災地で、被害の現実を語り継がなければいけないということは、とても重い責務でもあると話した。

人は、自らの経験から物事を考え、推測し、行動する。しかし、時にはその経験が、先入観として、人の命を危険にさらしてしまうこともある。だから、いかなる事態の時も、「大丈夫だろう」と安易に考えるのではなく、逃げるということが大事であり、常に万が一の心構えを怠らないことが必要であると語った。

『女川町』

法学部政治学科 1 年　髙橋祐介

当時、女川町の田村さんのご子息は七十七銀行女川支店の行員として働かれていたが、東日本大震災に伴う津波災害により命を落とされた。近くに堀切山という高台もあり、十分に逃げることができるような距離、時間があったはずだが、銀行の防災マニュアルや上司の「屋上に逃げろ」という指示に従った結果である。

田村さんは、組織の管理下に置かれている者の命をどう守るかという点について必死に自分達に訴えていた。再び同じような悲劇をおこしてほしくないという思いがしっかり伝わってくる内容であった。

自分も色々と考えさせられた。最も身近なものといえばアルバイト先の防災体制についてである。言われてみれば、災害発生時の行動については、初日の研修の際に軽く説明があった程度であり、詳細は各自マニュアルを読んでおくように、という感じだった。むしろ田村さんの話を聞くまで、実際に災害が起きた際にアルバイトの身である自分はどう行動するべきなのか、などとは考えたこともなかった。正直なところ、正社員の方々がどうにかしてくれるだろうと勝手に思っていた。田村さんも仰っていたが、七十七銀行のような悲劇は誰にでも起こりうることである。緊急時に如何に自分の身を、或いは部下の命を守るかという点について我々はもっと真剣に考えていくべきではないだろうか。田村さんは、12 人の行員が亡くなったという事実を、七十七銀行側はまるで無かったことにしたがっているように見えるという。最愛の息子を亡くしたという悲しみは勿論、当事者にしかわからないものであり、我々がとやかく言うべきことではない。しかし、企業は従業員という命を預かっている以上は、遺族の納得のいくまで原因究明や説明責任を果たすべきだと感じた。

最後に、我々は田村さんのお話を聞き、事実を知ったからには、周囲に伝えていく責任がある。また、何かしらの組織の一員となった際には緊急時に自分、そして人の命をどう守るのかを考えられる人間にならねばならない。

『女川町』

政治学科２年　沓沢 将太

田村さんの話は、私が想像していたものより遥かに苦しく、切なく、悔しい内容であった。

私は、今回の東北プログラムの目標として「町の景観よりは、人の心情や変化を重視したい」ということだったが、その目標をはるかに超えるプログラムだった。

田村さんは話の中で、息子の健太さんがなぜ銀行に残り続け、犠牲にならなければならなかったのか、いまだに疑問であるということを何回も私達に語っていた。銀行側の証言内容の話をするときには、語尾には「～らしいんです」や「～とも言われました」などと付け、証言に対して納得していない、または信じていないような様子が感じられた。なぜ支店長は息子に対して「高台ではなく屋上に逃げろという指示を出したのか」という田村さんの疑問に対して、「緊急マニュアルの一部に書いてある」と証言したそうだ。緊急マニュアルとは、女川支店の決定的避難場所を表す書類とは違い、分厚いマニュアルであり支店長の金庫の中にしか入っていなかったらしい。田村さんはこの証言に「この緊急マニュアルが行員全員に認知されていたかどうか怪しいものです。」と話していた。

また田村さんが話してくれた場所にあったモニュメントは震災の被害にあった遺族、田村さんを含む４家族で作られたものである。モニュメントの右の文章は一番目立つ文字で「命を守るには高台へいかねばならぬ」と書いてある。津波が来たら高台へ逃げる、そんなあたりまえのことが一企業のせいで出来ず、大切な息子を失った田村さん、津波によって大切な命を奪われた遺族の声がまるで聞こえてくるようなモニュメントだった。田村さんは、「銀行側は、支店長の判断は仕方がなかった判断だった、と言っていた。でも仕方がなかった命なんて一つもない」と話してくれた。さらに「これから皆さんも、企業、組織に属することになるだろうけど、この企業は防災に対して本気か、ってことも自分の目で、耳で、確認する必要があると思う」と伝えていた。「組織の中にいて組織に頼るな、震災被害は他人事じゃない」そんなふうに言われている気分だった。

当時、東日本大震災で起きた被害状況をテレビでたくさん見ていたが、正直全く実感がなかった。まるで、海外で起こった震災映像を見ている気分だった。放射線が危ない、仮設住宅にはまだ沢山の人が住んでいる、など知ったような知識で東日本大震災を認識していた。しかし実際に遺族から話を聞き復興景色を見ると、当時の自分がとても恥ずかしく申し訳ない気分になった。本当の意味で「震災はまだ終わってない」と知ることができたと思う。今回の東北プロジェクトで聞くことができた田村さんの話は、私にとって忘れてはいけないものになったし、「本当の東日本大震災」を友達や知り合いに話す使命を感じた。

『大川小学校』

法学部政治学科 3 年 廣瀬碧海

（現在の大川小学校）

大川小学校は、震災当日津波によって全校児童 108 人のうち 74 人が死亡(または行方不明)教職員も 10 人死亡(行方不明含む)という最大の被害者がでた場所である。大川小学校では、娘を津波により無くした遺族であり、自身も当時中学校の教員として被災した佐藤敏朗さんに案内していただいた。

大川小学校は、近くの北上川を逆流してきた津波と追波湾からの津波の二つの波が校庭でぶつかり渦を巻き破壊力が大きく増したそうだ。津波到達まで 51 分という十分な避難時間があったのにもかかわらず校長不在という状況もあってか教職員の中で意思決定が行えず結果到達 1 分前まで行動せず被害が大きくなった。大川小学校には、裏山があり佐藤さんは、私たちにその場所を紹介してくれた。学校から目と鼻の先であり登るのも苦ではない。まして児童たちは、学校行事等で裏山に入ることがあり慣れ親しんだ場所でもあった。そこへ避難していれば多くの救われるべき命は救われただろうと佐藤さんは指摘していた。また、佐藤さんは、元教員という立場から学校経営にも問題があったとしている。校長不在で教頭が実質トップの立場にあり、その教頭が判断をできていればこのような事態にはならなかっただろう。校庭に集められた児童の中から「裏山に逃げよう」という声も出ていたという証言もあり、あの時適切な判断ができていればと感じてならなかった。

佐藤さんは、私たちに「命を救うのは、判断、行動」であるとし、震災、津波、大川小の悲劇を自分のこととして考えて欲しいとおっしゃっていた。

私は個人的に教員を目指している身として佐藤さんのお話、一つ一つの言葉は重く響き佐藤さんに、教員として教育現場がこのような自然災害にあった際、何をするべきなのかという質問を投げかけた。佐藤さんは「命を守り、輝かせる場所が学校であり、教育として子どもの命を輝かせて、その結果、子どもたちの命を守ることにつながる」と答えてくださった。直接的に大川小学校の話ではないが、佐藤さんの遺族であり元教員という立場から出てくる言葉は、私たちのような世代は胸に止めなければならないなと感じた。また、大川小学校集団訴訟に関しては、報道のあり方など佐藤さんが置かれている特殊な立場によって多くの悩みを抱えていると話してくれた。しかし、訴訟は真実を知りたいという遺族の最終手段なのだと教えてくれた。

佐藤さんからは、大川小学校の悲劇だけでなく現代の教育現場の抱える問題やモラルの問題など様々なことを学び聞くことのできる視察となった。

『大川小学校』

政治学科 2 年　沓沢 将太

佐藤さんの話によって震災に認識、対応を改めて考えさせられた。日本の観測史上最大規模と言われた東日本大震災の貴重なお話を聞くことができた。

話をしてくれた佐藤さんの娘、みずほさんは当時 6 年生で大川小学校に通っていた。3 月といえば卒業、中学校入学式、制服の話などしていた。3 月 11 日、東日本大震災が起こった日はみずほさんの中学校の制服が出来上がった日だった。しかし、佐藤さんはみずほさんの制服姿を見ることができなかった。

また、話の中で「学校の全ての時計が 3 時 37 分で止まっている、この時刻に津波がきた」と言っていた。この時まで先生と生徒は校庭に集まっており避難のために動き出したのが津波到達の 1 分前だった。全校生徒の 108 人のうち 74 人犠牲、11 人の先生のうち助かったのは 10 人だった。さらに、佐藤さんが話している場所の後ろを見ると、渡り廊下であったであろう柱は根本か折れていて、斜めに傾いたコンクリートの塊が見えていた。佐藤さんの話、大川小の震災後の悲惨な光景で津波の怖さ、破壊力が容易に想像できた。佐藤さんは「俺らってさ、対策っていうと時間とか条件とか情報のことを言うけど、実際に自分の足を動かさなければ逃げられないわけで、だから命を救うのは情報とか時間とか手段ではなくて、行動である。あるいは、その行動につながる時間、訓練であり、マニュアルである、という考えでいかないとダメ。いくら立派な山があって、時間があってもここ(しいたけやま)にこなかったわけであるから、だから誰もしかたがなかったなんて思ってない、しかたがなかったなんていったら死んだ先生に申し訳ない、と俺はすごく思う」と話してくれた。実際に当時女川で中学教師をやっていた者として、大切な娘を亡くした者としての声はとても心に響いた。

佐藤さんは学校の景色の説明や被害状況を説明しているときより、娘のみずほさんの話をしているときのほうが落ち着いた声であり、なつかしそうに、悲しそう話しているように見えた。もしかしたら震災の被害に遭われた方、津波の被害に遭われた遺族の方がこのような活動をしているのは、「大切な人の話」を来てくれた人たちに話すことによって多くのことを知ってもらい、忘れてはいけないものとして聞いた人の心の中で生き続けてほしいという願いなのかもしれないと私は思う。当時、震災の被害はニュース、新聞や本で多々目にすることはあったが、実際に被害地に足を運び生でその風景を見ると必然といい意味で忘れられないものになった。「百聞は一見に如かず」の本当の意味を知れた。

『大川小学校』

政治学科３年　新藤祐希

2011 年 3 月 11 日の大地震で、石巻市立大川小学校では全校 108 名中、74 名の児童が死亡あるいは行方不明となった。また、教員も 10 名が亡くなっている。108 名といっても当日欠席、早退、保護者が引き取りに来た児童がおり、最終的に校庭にいた児童は 70 数名で、4 名だけが奇跡的に助かった。教職員も助かったのは 1 名だけだった。学校管理下で、このような犠牲を出したのは大川小以外になかった。大川小より海に近い学校はもちろん、もっと海から遠い、上流の学校や保育所も逃げていた。

当時、震度 6 強の地震が来た後大津波警報が発令され、防災無線やラジオ、市の広報車がさかんに非難を呼びかけていた。学校の体育館裏には緩やかな傾斜で、「しいたけやま」と呼ばれる椎茸栽培の体験学習も行われていた場所があった。少し登ると学校を見下ろすことができるほどの高台である。迎えに来た保護者や、校庭に避難していた一部の児童からもあの山に逃げようというほどであった。しかし、校庭にいた教職員、児童たちは動かなかった。やがて津波は約 4 キロ遡り、堤防を越えて大川小を飲み込んだ。15 時 37 分、地震発生から 51 分、警報発令からでも 45 分の時間はあった。子供たちが移動を開始したのはその 1 分前、移動した距離は先頭の子供で 150 メートルほどであった。そして、なぜか山ではなく川に向かったのだ。ルートも、1 人がやっと通れるほどのフェンスの間や民家の裏の狭い道を通っていたという。

「時間も情報も手段もあったのに救えなかった、危機感を感じていながら『逃げろ』と強く言えなかったのはどうしてかを議論していかなければなりません。どうして組織が機能しなかったのかです。あの日から、自分自身に言い聞かせている、重い重い言葉です」と佐藤さんは言う。佐藤さん自身も大川小に通っていた娘さんを亡くしている遺族の一人である。震災によって家族を亡くした悲しみ、辛さは計り知れない。しかしそれを乗り越え、全国から訪れる人たちのために佐藤さんは語り続けている。「守るべき命、しかも守ることが可能だった命を守れなかった事実から目を背けてはいけません。警報が鳴り響く寒空の下、校庭でじっと指示を待っていた子どもたちに耳を澄まし、目を凝らせば、方向性は見えてくるはずです」佐藤さんは、学校をはじめとした私たちの周りにある様々な概念、価値観、システムを見直すということが、東日本大震災で現代社会が突き付けられた宿題であると主張する。

震災からから 6 年たった今でも、起きたことから目を背けずにその問題と向き合っている人がいることを忘れてはならない。また、その人が主張することに耳を傾け、考え、周りの人たちに共有していくべきことが大事であると感じた。

『南三陸戸倉中学と被災地』

政治学科２年　綱島　健

私たちは 2 日目に、宮城県の南三陸町立戸倉中学校を視察した。この戸倉中のある南三陸町は大震災の際、海から 22.5 メートルもの位置まで水に浸かった地域で、戸倉中でも生徒 1 人と教師 2 人の犠牲がでてしまった。そして、このような被害をうけたこの地域を視察し、東日本大震災という災害の大きさを改めて認識した。

まず初めに、私はこの被災地をめぐった中でも特に津波の高さに驚かされた。というのは、戸倉中は元々避難場所であったため海面から 10 メートル程ある場所にあったのだが、水に浸かった線を見ると自分の身長よりもずっと高い位置にあり、いかに自分が甘く考えていたのかを思い知らされた。

次に私たちは、戸倉中に避難した方々が更に避難した高台を視察した。そこは戸倉中から歩けば 10 分程はかかる位置にあり、地域の方や子供も多くいた当時ならばもっと時間がかかるため、津波が迫っている中で移動することは危険もあったかと思われた。それにもかかわらずこの場所へ避難したのは、チリ地震を覚えていた地元の教員の意見から、判断を校長先生に任せることになっていたからである。しかし、事前に避難場所を考え、校長先生もより安全性の高い避難場所へ行くことを選択したにもかかわらず、津波はこの高台にまで押し寄せた。

この高台の更に上には神社がある。そこはこの高台に避難した方々が、津波が押し寄せるのを見て更に上に避難し、救助が来るまでの間を過ごした場所であった。その神社へと向かう途中には津波の到達した場所を示す石碑があり、「これより上に逃げるよう」と書かれていた。私はこの石碑を見て津波の大きさに驚くと同時に、こんなにも大きな災害があったことを知ってもらい二度とこのような被害を出さぬように経験を活かしてもらいたいという思いの表れだと感じた。とても印象に残った。

このような南三陸町にきた津波とそれに対する戸倉中の方々の避難のお話しを聞き、その場所を見た中で、自分がこれまでに東日本大震災について調べてきても実感を持っておらず、他人事としてとらえていたのだと知った。そのためこの場所での経験で得られた実感を大切に、多くの方が仰っていた「我が事」と捉えることを意識してこれからに活かしていきたいと思う。

『気仙沼杉ノ下地区』

政治学科２年　柳澤拓海

気仙沼市は宮城県北東部に位置する市である。2011 年 3 月 11 日のマグニチュード 9，0 の大地震によって、気仙沼市は震度５～6 弱を記録し、家屋の倒壊や大津波による被害、またそれによって火災が発生し、甚大な被害と多くの犠牲者をだしたのである。また、気仙沼は今回で２度目の被害を受けた場所でもある。1896 年の明治時代にマグニチュード 8 以上の大地震が起こり、大きな被害を受けた。その後の 10m を超える大津波も北海道から宮城県までと到達範囲が極めて広かった。

「春彼岸津波寄せ来し浜に立つ我が曽祖父も波に消えたり」。震災前に畠山登美子さんが詠んだ詩である。震災前に朝日歌壇に投稿して入選作品として震災から 1 か月後に発表された。この詩を読んだ畠山登美子さんの祖父は明治三陸大津波で父親を亡くし、被災した村人とともに海岸から集団で、海辺から少し離れた位置である波路杉ノ下地区まで移転し、一家を構えたという。しかし、それから 150 年後である 2011 年に再び被災をしてしまった。畠山登美子さんの祖父が建てた屋敷の西側には 35 本の松の木が植えられており、年輪が約 110 年～120 年ほどであった。これは危険な海岸から津波の心配がないと、畠山登美子さんの祖父がこの地に移ってきてから植えたとされている。しかし、この木々は今回の津波によって枯れてしまい、一本を残して伐採されてしまった。

また、畠山登美子さんと曽祖父の世代を超えた悲劇だけでなく、今回の津波によって多くの人命が失われた事実もある。「ここにいれば大丈夫だ。」そう言って、この地に 93 名の人々が避難をしてきたが、第一波で家や車が押し寄せ、その後第二波、第三波と続き、この地にいた人々が流されてしまった。あなたを忘れないと書かれた石碑の裏面にはその犠牲者の名前が刻まれている。そのほとんどが 60 歳以上の高齢の方ばかりであった。しかし、6 歳など小さな子も亡くなっているのも事実である。

この気仙沼杉ノ下地区は明治、平成と大津波によって二度悲劇をもたらした。明治三陸大津波を受けてからの指定された避難所も被災したということで、私は津波を軽視できない存在だと考える。前回の津波の到達地点を知るのではなく、確実に身を守れるような高台や避難所を設ける必要がある。また今回の悲劇を私たちは知る必要もあると考える。

多くの尊い命が失われたこの気仙沼で東北以外の地域に住んでいる人々においても、他人ごとだと思わず、対策やその災害からどう守るか考えるべきである。

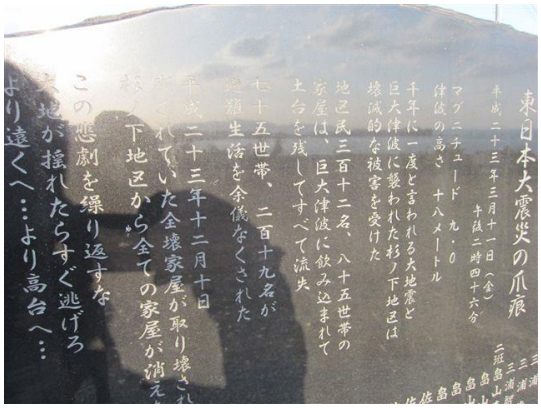
『気仙沼杉ノ下地区』

政治学科 3 年　新藤祐希

宮城県気仙沼市杉ノ下地区では、津波により住民 312 人の 3 割に当たる 93 人が犠牲となった。この地区には杉ノ下高台というなだらかな丘があった。標高は海抜約 12 メートルで、頂上には避難所である集会場があった。ここなら安全だろうと多くの住民が避難した。しかし、津波はその丘ごと飲み込んで避難してきた 50 名余りが死亡・行方不明となった。安全とされていた場所にも津波が襲った。

この地区は、以前にも昭和三陸津波によって被害を受けていた。そのときに高い所へ、遠い所へ逃げなければならないという教訓を学んだ。その教訓から、杉ノ下地区には津波防災マップがあった。高台は浸水しないとされる白色、その周辺は約 5 メートルの浸水が予想され、赤く塗られているものである。これをもとに住民は避難場所や避難ルートを考えたりしていた。このことなどから、杉ノ下地区の住民は防災意識が高いとされていた。しかし、普段からあった高いところに逃げれば安全という意識では想定外に高くなった津波から身を守ることはできなかった。今回多くの住民が犠牲となった高台の集会場はあくまで緊急避難場所だった。二キロほど離れたところには階上中学校など指定された避難所が他にもあったのだ。しかしそれを把握する住民は少なかったのかもしれない。もしくは、ここに逃げれば安全という過信が津波から逃げる足かせとなったのかもしれない。

杉ノ下地区の住民たちは、東日本大震災による犠牲で津波の恐怖、身を守る大切さを再認識することとなった。2012 年 3 月、遺族会が海岸から約 200 メートル内陸の高台に慰霊碑を建立した。慰霊碑には犠牲になった 93 人の名が刻まれ、その横には「この悲劇を繰り返すな　大地が揺れたらすぐ逃げろ　より遠くへ…より高台へ…」という言葉が刻まれた。多くの人が訪れて故人を供養し、津波避難の教訓を伝えたりする場になっている。



この場所でも守れるはずだった多くの命が失われた。しかし、この犠牲を無駄にしてはならない。杉ノ下地区で起きた悲劇からもたくさん学ぶことはある。常に危機管理を持ち、自分の身をどうしたら守れるかをあらかじめ決めておくこと。さらに想定外のことも視野に入れておかなければならないということが大切であると感じた。

『気仙沼向洋高校』

法学部政治学科１年　髙橋 祐介

気仙沼向洋高校は、津波によって校舎や周辺が大きな被害を受けたものの、死者は１人もでなかった高校である。私は実際に現地を訪れて話を聞くまでは、完璧にマニュアル通り、慌てることなく全員が避難できたのだと思っていたが、実際は全くそうではなかった。

まず、迅速に避難ができた理由は、高校生であった為、「逃げろ！」の一言で各自緊急性の判断がついたからとのことである。また、「可能な限り高いところへ逃げる」という判断も、死者数０という結果に繋がった。気仙沼向洋高校以外にも津波の被害を受けた被災地で話を聞いたが、津波が襲来すると分かったときに「可能な限り高いところへ逃げる」ことは、どのような時や場所でも鉄則なのである。

当時の状況が決して冷静だったわけでもなかった。教員の中には本当に死を覚悟し、校長の許可を得て最後の一服(煙草)をした者もいたという。それほど緊迫していた状態だったことが想像できる。

気仙沼向洋高校は、震災から６年以上経った現在でも当時の状態がそのまま、生々しく残っている状況だった。個人的に特に衝撃的だったのは、魚の死体がそこら中に散らばっていたことである。これは付近の水産加工場が津波によって崩壊し、そこで冷凍されていた魚が流れてきたものだという。直後は臭いが本当にひどかったそうだ。勿論、魚以外にもパソコン、教科書、部活日誌など、どこの高校にあるような物もボロボロになった状態で転がっていた。この様子を見て、普通の学校生活も、自然災害は一瞬で奪ってしまうのだなと恐ろしさをリアルに感じた。もし、自分の母校がこんな状態になったらと考えると悲しくてたまらない。

今、我々は「普通の日常生活」を過ごしているが、いつまでもこの状態が続くという保証はどこにもない。現に、６年前に同じ日本で、自然災害によって「普通の日常生活」を過ごせなくなってしまった地域、人々は多く存在する。だからこそ我々は、「今」を大切に生きながら、同じようなことが起きた際の被害を最小限にするために、様々な過去の教訓から学ぶ必要があるのではないだろうか。この視察をさせていただいて、そんなことを考えさせられた。

『気仙沼向洋高校』

政治学科 1 年　猪俣　友徳

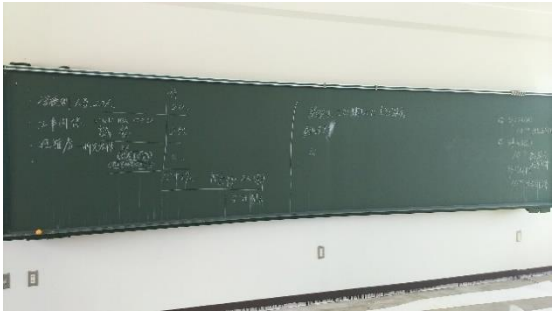
宮城県気仙沼向洋高等学校は、元々水産系高校として発足した学校で、平成 23 年には創立 110 周年を迎えた歴史と伝統のある学校である。津波を受けた旧校舎は、気仙沼市が国の復興交付金を活用して南校舎を保存し、我々が視察する時期には他の校舎は解体が始まっている予定だったのだが、解体の遅滞により津波の傷跡の残る校舎をすべて見学することができた。津波で流された自動車が校舎内の複数個所に突っ込んでいたり、階段の手すりや鉄筋コンクリートのベランダが破損していたりと随分と損傷が激しい校舎であったが、当時校内に残っていた生徒達は教職員の誘導のもと、まず地福寺(気仙沼向洋高校から約 1km)に避難し、次に階上駅（地福寺から約 1km)、さらに消防団員の注意喚起により階上中学校へと避難した為、直接津波を見ることはなかったとのことだ。この機転の利いた避難行動については首都直下地震が懸念される今、大いに参考にすべきであると思う。

↑校舎 3 階に突っ込んだ自動車

↑手すりが壊れてしまった階段

一方、校内に残った教職員や大規模改修工事中の工事関係者は、津波到達以前の上へ上へと臨機応変な避難行動により、最終的に屋上に上がり全員が難を逃れることができた。しかし、当初津波は 4 階建ての校舎を飲み込むかと思われたようで、教職員の一人が校長に最後のタバコを吸う許可を貰った話などを聞けば、極めて過酷な状況であったのは想像に難くない。また、戸建て住宅が校舎と生徒会館の間にはさまり、夜を徹して救出活動に当たり、無事女性二人を救出するというドラマチックな出来事があった一方で、避難後に校舎内の配線が盗まれるという、思わず不快感を催すようなこともあったようだ。

↑屋上の出入り口の上に上った方もいたらしい



↑あの日から時間の止まった黒板

『気仙沼向洋高校』

政治学科 2 年　柳澤拓海

気仙沼向洋高校は宮城県気仙沼市にある県立高校で、海洋、機械、食品、情報などの専門高校でもある。この学校は広く、古くは水産を専門とした学校であったため、海との距離が近かった。景色がきれいだと感じた。

2011 年 3 月 11 日に発生した巨大地震により、この学校も甚大な被害を受けた。津波は高さ 10m を超え、学校も 4 階まで浸水してしまったという。昇降口や中庭などは津波で流された物が多数あり、中庭には津波で流されたとされる車が直立状態で当時のままそこにあった。

また、校舎内は津波によってとてもひどく荒らされており、何かの部品といった小さいサイズから、木などの大きいサイズのものまで、教室や廊下に散らばっていた。津波の恐怖が感じられた。当時も通常の学校生活を送っていたとわかるようなものも学校中でみられた。

当時この学校には、約 170 人の生徒が部活やクラス行事などで校内に残っていたが、津波が来る前に、高校生たちは自己判断が上手くでき、全員すぐに避難できたという。また、校舎自体も地震による揺れや 10m を超える津波にも耐えたという、確かに校舎の外面からは震災を受けたというのはわからなかった。しかし 4 階の海側の教室は欠けていた。

個人的に驚いたのは、魚が校舎内で多数見つかったことである。しかしこれは海から流された魚ではない。水産系の学校である気仙沼向洋高校の冷蔵庫で保存してあった魚であるという。これらが腐敗し、ハエがたかったということで震災後は臭いがひどかったと言う。

震災の日の夜は雪が降り、大変寒い日で学校のカーテンや暗幕を使って寒さを凌いだという体験談も印象に残っている。

私はこの学校に行って、とても衝撃を受けた。1 階から 4 階まで津波に浸かり、松の木も津波に流されて校舎内にあったり、車も庭に直立状態であったりと、驚くことばかりだったがいろいろ学ぶこともできたと感じる。海に近く津波の危機意識が高かった高校生たちは自己判断して臨機応変に対応して身を守ることができた。これは私たちが学ぶべきことだと考える。例え、海が近いからではなく海から遠くてもこのような意識は大事であり、自分を守る手段であると、この学校で知ることができた。ガイドをしてくれた畠山さんは他人ごとだと思わず、普段から意識すること、自分たちの地元だけでなく旅行先でも起こりうる出来事だから無関係ではないと伝えている。いつ起こるかわからず、また規模も不明な津波や地震の脅威からの意識や備えをこれからしていくべきである。

『つなかん』

政治学科３年　林　加奈恵

宮城県気仙沼市唐桑町鮪立地区に位置する「唐桑御殿つなかん」は、2012 年に開業した。つなかんは、東日本大震災の被害を受けた建物のひとつであり、震災前は、民宿代表の菅野一代さんの自宅であった。地震の直後、自宅にいた菅野さんは、家族で高台の方へすぐに避難し、津波が、鮪立地区を襲う光景を目の当たりにしたという。すべてが波にのまれていく。この時、菅野さんは、「まるで地獄を見ているようだった」と語った。

津波が引いて、屋根と柱だけの自宅を壊そうとした時、がれきの片づけや泥かきに来ていた学生らに、寝泊りさせてもらえないかとお願いされ、応急修理だけして、2011 年 8 月に学生に開放すると、約 10 か月で、およそ 1000 人もの学生が訪れた。このことがきっかけで、菅野さんは、学生がいつでも帰ってこられる場所にしようと、民宿経営を決意した。

しかしこの 6 年後の、2017 年 3 月、菅野さんにさらなる悲劇が襲い掛かる。気仙沼市で、小型漁船「第 1 信盛丸」が転覆し、乗っていた 1 人が死亡、2 人が行方不明となった。この死亡した 1 人と行方不明になった 2 人は、菅野さんの家族で、死亡が確認されたのは、長女の早央里さんで、行方不明となったのは、菅野さんの夫和享さんと三女の夫大宮拓人さんだ。この事故が伝えられた時、菅野さんは受け入れきれなかった。外部と連絡も絶ち、食事ものどを通らず、何日も何日も、何をするでもなく、ただ時間だけが過ぎていったという。

「地獄以上の地獄」が、そこにはあった。6 年前の津波の光景は、菅野さんにとって、地獄のようだった。しかし、家族の事故を聞いて、菅野さんは、地獄を超える本当の地獄を感じた。事故直後は、誰の言葉も、励ましも、心に響かなかったという。しかし、事故から 2 か月ほど経ったころ、菅野さんは、このままではいけないと、前を向くことを決心した。

菅野さんは、「悲しみは忘れることはできないけれど、時間が経てば、いつか気持ちも前向きになってくる」と語った。同時に、「そう思わなければやっていけない」とも話した。この言葉は、2 度も地獄の思いを体験し、2 度とも立ち直ることができた菅野さんだからこそ、言える言葉であり、その思いを、自身の民宿を通して、多くの人々と支え合いながら、伝えていく、つなかんの女将の、「強さ」と「優しさ」を強く感じた。

『陸前高田』

政治学科２年　北村　浩也

○“看板”が全てを物語る

ガイドを務めて下さった観光協会の河野さんが、「東日本大震災で岩手県陸前高田市の市街地に押し寄せた津波は高さ１３メートルを超え、全域をのみこんだ。市の指定避難所に避難しながら、犠牲になった人も少なくない。市役所の向かいにあった、指定避難所には約 80 人もの人が逃げてきたが、そこで助かったのは 10 数人だ。」と私たちに、淡々と説明をした。“13 メートルを超える津波”だとか、“市内全域をのみこんだ”だとか、一見、耳を疑いたいと思うような、そんな情報は嘘だと信じたくなるような言葉だらけだったのだが、それらの被害の現実を、津波の恐ろしさを、少しでも高台へ逃げることの大切さを、旧道の駅の目の前にある、高さ 15 メートルのガソリンスタンドの看板のてっぺんを指す矢印と、横に書かれた“津波水位 15.1M”の青い文字が。いや、ガソリンスタンドの看板それ自体が、私たちに一行に向けて、今回の被害の大きさ、津波の怖さ、逃げることの大切さを、東日本大震災がもたらした“教訓”と言うべきもの全てを、私たちに一行に教えてくれたような気がした。

（↑ガソリンスタンドの看板）

○“心の防潮堤”を高く

河野さんは先輩ガイドの言葉の引用として、1 時間弱にわたったガイドのまとめを次のように締めくくった「心の防潮堤を高くして下さい、人工物に頼らないで下さい。」と。

私たちは日頃、「津波が来ても防潮堤があるから大丈夫。」だとか、「地震が起きても耐震工事がされた建物だから大丈夫。」と、心のどこかで人間が作った“人工物”を頼り、自分自身の身の安全を過信しがちであると思う。防潮堤がいくら高かろうと、いくらコンクリート製で丈夫だろうと、いくら科学的に津波の高さや震度を予想し、それに備えようと、“自然”が持つ本当の恐ろしさに、私たち人間が作る“人工物”など微塵も敵わないのではないか。また、たとえ東日本大震災の時に無事だったからといって、次の災害時にどうなるかなど、誰も予想できないように思う。

自然の恐ろしさと、人工物が敵わないという一種の“虚しさ”とも呼べるそれに、唯一勝てる術は、私たちの“心の持ちよう”なのではないかと、私は思う。今、この瞬間に災害が起こるかも知れない。地震の後には津波がやってくる。海沿いや津波の危険がある場所で地震に遭遇したら、一目散に高台へ逃げる。身の安全を過信しない。など、常に“もしも”の時に正しい行動が取れる、そんな心の持ちようでいようと、今ここに決意し河野さんのお話を聞いての報告とする。

参加学生の声

大東文化大学東北視察「大規模災害をめぐる地域・政治・人」アンケート

2017 年 11 月 4 日　武田知己

１　今回の視察で印象に残ったものを二つ挙げてください。

〇現地の方々の話・現地視察のすべてがよかった。

・現地の方々は、自分が経験したことのない自然災害で大事な人を失っていて、その中で、今後同じようなことを繰り返してほしくなくて自分達にどんなことをしたらいいかなどを教えてくれた。家族を失って 6 年経った今でも悲しみは消えていない、震災はまだ終わっていないとお話をいただき、現地に行くまでは復興も進んでいると聞いていたので勝手に軽く考えていた自分が話を聞く中で考えが変わっていきました。自分と重なる点もありより深く感情を込めて聞くことができました。また、現地の様子を見たとき、初めて行ったので、海岸沿いの地域などは元からこのような様子で建物も無い地域なのかなと思ってしまっていました。しかし、見学を進めていくに連れてまだ復興の進んでいない地域、建物を見て話を聴く中で元はここらへんは建物がたくさんあったと聴き震災の恐ろしさを改めて感じました。

〇原発の現状と波の高さです。1 つ目に、なぜ原発の現場が印象に残っているかというと、今回初めて、原子力発電所に入らせていただくことで、目に見えない恐怖というものを、すごく感じたからです。東京にいる時は、基準値を下回っているから大丈夫だと、安易に捉えていましたが、実際に、福島第一原子力発電所に訪れることで、原発に対して、初めて恐怖を感じました。そんな原発が、震災から 6 年経った今も、まだ燃料の抽出作業に取り組めない状態であること、汚染水の規模など、課題がまだまだ山積みであると再認識しました。さらに 2 つ目の、津波の高さが印象に残っている理由は、想像以上に高かったということもそうですが、場所や地域による高さの違いに驚いたからです。地震の震源地や規模などの情報で、ある程度の津波の高さは予想できるのではないかと思っておりましたが、海からの距離だけではなく、それぞれの地域のまわりの環境にもよって、津波の高さがあんなにも異なるということを、初めて知りました。

〇福島第一原発視察

・実際の「現場」を見ることができ、東京電力の石崎芳行様の今後へ向けてのお話も聞くことができたから。

・テレビの中で観ていた原発がすぐ目の前にあることが信じられませんでした。帰宅困難地域は震災が起こった当時のまま残っていて、本当にあの日から時間は止まったままなのだと実感しました。また、実際に石崎氏の話を聞き、今後の福島の復興について質問できたのでとても印象に残っています。

〇福島復興本社

・東電が責任を負いこのような会社を設立し福島の復興のために様々な活動をしているということを恥ずかしながら初めて知った。具体的な復興ビジョンを示し、そのために今何をすべきかを石崎特別顧問を中心に活動していることを知ったため。その反面、結局都心

の電力を賄うために火力発電所を増設し、そのために福島の人々は働くのかなと感じてしまった。もっとも説明では雇用の受け口とするとしていたが。機会があればその点を石崎特別顧問がどう考えるのかきわどい質問だが投げかけてみたい。
〇いわき市の大熊町仮設住宅
・２年を想定して作った仮設住宅に、住んでいる人が今もいる点、また不便なところにあったこと。
〇女川視察
・今現在の社会の問題が、直接的に浮き彫りになった出来事だなって思いました。
・(女川町の田村さんの話) から、企業と防災という、新しい視点を知ることができたから。
・女川での田村さんの話がとても印象に残りました。女川は津波の常襲地域であり、高台に逃げるのは鉄則であるはずなのに、銀行側がそうしなかったり、責任を逃れようとしている。遺族の言葉が届かないということを感じました。
・津波の恐ろしさと残された家族の心境について生々しく話して頂き、とても印象に残っています。命の大切さを思い知りました。企業と災害について少し詳しく調べてみたいなと思いました。
・私は事前学習で女川を担当していたため、女川でとても大きな被害があったことは知っていたつもりでいました。しかし、田浦さんの話を聞いて、復興で先を行っていることばかり見ていて、そのことが有名になるほどの被害をどこか軽く考えていたのだと気づかされました。また、企業の防災というこれまでの自分にはない視点を得られたことや復興の状況を見られたことも含めてとても印象に残りました。
〇荒浜小と気仙沼向洋高校の視察
・理由は、私は教員を目指しており、津波の傷跡の残る校舎を見て深く考えさせられた為です。
〇大川小学校
・１つの判断の遅さが生徒、先生の命を奪い、助かった命が助からなかった。当時のことを思い浮かべると無念の気持ちしかないです。
・私はそれまで大川小について本当に概要しか知らず、完全に他人事という感覚でいました。しかし、語り部の方の生々しい当時の体験や今でもなお掃除を欠かさず花を供えてあるのを見てとても衝撃を受けました。私が考えていたよりもずっと遺族の方の傷は深く、時間が経ってもそう簡単に癒えたりしないのだと知り、震災はまだ全く終わっていないのだと、とても印象に残りました。
・敏朗先生の「子供たちの命を守り、輝かせるのが学校」と言う言葉が胸に刺さり自分自身の信念にしなければならないと感じたため。また、同じ犠牲を繰り返さないためになにをすべきか、何ができるかと言うことを考えて行きたい。
・大川小学校での佐藤敏郎さんのお話と、校舎の被災風景。佐藤さんは、いち遺族として、元教師として。２つの視点から大川小学校での出来事を語ってくださり、(教師・バス運転手のほか) たくさんの子ども・大切な命が犠牲となった事実に目を背けそうになったけれど、　　そこに目を背けることなく、あの日の大川小で起こったことにじっと目を凝らすことで、何か大切なことが見えてくるのではないかと、私の中に大きな〝気づき〟を与えて頂いた点で、印象に残った。

〇仙台東部道路
・あの道路を境目に、生死が分かれてしまったことを考えると、かなり悲惨な現実だと思ったこと。
〇気仙沼視察
・気仙沼での畠山登美子さんの詩も強く印象に残っています。明治三陸大津波で曽祖父を失った畠山さんが今回の津波で亡くなったと聞いて、とても悲惨なことだと改めて知ることができました。
・気仙沼向洋高校の視察では、海と接していない長野県出身で、海と接していない埼玉県在住の私にとって、本当の津波の恐ろしさ・津波の威力を実感する機会は無かったが、気仙沼向洋高校の三階に横転していた車を目の当たりにしたとき、津波の威力と怖さを心から実感できた点で、印象に残った。

2　改善点
〇特にないです。快適な学習ができました。
〇個人的な意見になりますが、福島の視察が少なく、残念でした。東電さんのお話ももっと聞けたらなと思いました。さらに、再来年度から単位が与えられるかもしれないとありましたが、それにはあまり賛成ではありません。この被災地視察を、興味本位や、単位取得のためだけに参加するような学生が出てきてしまうような気がします。なので、公欠を取れるようにするだけで良いのではないかと思いました。
〇被災者や河北新報記者の方々の話だけではなく、公務員などの震災当時に働いていた行政職員の話を聞くことができたら、さらに良かったかと思います。
〇今回はテーマとして命を守るなどを掲げていたため、遺族の話などを聞くことが多かったしそこから様々なことを感じ考えさせられたため大変良い機会となった。来年以降は、もっと前に進んで行こうとしている被災地にフォーカスを当て未来志向で復興に取り組んでいると言う側面を学ぶのも面白いのかなと思う。もっとも継続的に同じメンバーが集まって学ぶわけではないからなんとも言えないが事前学習で震災の大きな流れや今年やったことを通して勉強し現地視察では前述した点を学ぶと言う方式も良いかと思う。
〇今回どうしても福島が薄く感じてしまった。原発の中に入れることは本当にいい機会だし何度もあるチャンスではないためとても有意義だったが福島で復興に取り組んでいるのは何も原発だけではなくそのほかの場所でも頑張っている人々はいっぱいいるのでそのような方々にフォーカスを当てるのも良いと思う。加えて事前学習で風評被害を学んだのにもかかわらず現地視察でその視点が欠けていたのかなと感じた。
〇次回参加するならば、是非「さとうみファーム」の見学もじっくりと日中にしたいと思います。
〇どの視察先もとても重たかったため、もう少し時間にゆとりをもって視察出来れば良かったと思う。
〇2 日目の夜、大川小などの話をしていて面白いと思ったので、1 日の終わりに少人数のグループに分かれて感想や意見を言い合い、日ごとにグループを変える。という機会があれば話し手の回転も速いし、比較的時間も少なくて済むと思うのでいいのではないかなと思いました。

○福島原発の被害を受けている方の話を聞いてみたいと思いました。
○民泊などやっているところがあれば泊まってみるのも良い経験になるのではないかと思いました。(つなかんもよい)
○もう少し時間に余裕を持って、視察をすべきだと思う。 時間を設けていただいたのに、復興本社では２名しか質問ができなかったことから。
○仕方ないのかもしれませんが、予定が結構キツキツだなと思いました。そして、途中で帰ってしまった人がいましたが、事前確認やもう少しまとまりを強くしたほうがいいのかなって思いました。次回はぜひ、石巻について詳しく知りたいです！

３　全体の印象など

○6 年前に起きた災害、東日本大震災。震災はまだ終わってないという言葉を耳にしていましたが、本当にその通りだと思いました。遺族の死についてまだ前に進めない方々、家が流されまだ仮設住宅に住んでいる方々、津波に街を流されたがまだ復興事業を行えない街、これはほんの一部で、あの日被災を受けた方々１つ１つのストーリーがあるんだなと痛感しました。アクティブラーニングで見たこと聞いたことを、自分の中で整理してこんなことを 2 度と起こさないように自分の身の周りの人たちに発信していこうと思いました。濃密な３日間、貴重な体験をありがとうございました。
○全体の印象としては、とにかく内容が濃かったです。肉体的にも精神的にもかなりきました。しかし同時に、被災地の出来事を、より自分のことのように考えることができました。今自分にできることは何か。それを考えさせられる、本当に貴重な体験となりました。
○非常に良い経験になった研修でした。参加してよかったです。見たこと、聞いたこと等、記憶が鮮明なうちにまとめていきたいと思います。ありがとうございました。
○行きと帰りで被災地に対するイメージがガラリと変わりました。被災地と聞くとどうしてもマイナスなイメージが先行してしまいがちでしたが、震災前よりも良くしよう、前を向いていこうとする方々がいることを知れたことは、とても大きな収穫だったと思います。
○この 3 日間はとても濃厚な時間だったと思います！実際に震災を経験しているはずの私たちが忘れかけていることや、被災地の現状、当時の様子など様々なことを見て、聞いて学ぶことができました。また、あまり関わることのない、1 年生や（特に）3 年生とお話が出来たりして本当に楽しかったです。
○もっと事前学習ができれば良かったと思うが、どの視察先も震災・防災・命の大切さを考えさせられる場だったと思うし、語り部の方々のお話も印象深く、一生忘れない・忘れてはいけない、2 泊 3 日になった思う。
○今回のプログラムはとても貴重で有意義なものだと感じました。語り部の方のお話は全て印象的で、河北新報の方々はバスの中でもずっと説明や質問に答えてくださりました。個人的に参加するようなものではここまでしていただけるのは無いと思ったので、今回のプログラムは本当に貴重なものだと感じました。加えて、語り部の方も新聞社の方が考えてくださったからこそ、全てが強く印象に残るほどのお話だと思いました。
○積極的に質問をすることができなかった。次回参加するならば今回宮城の震災の状況しか見学をしなかったが震災をもっと知るためにはやはり、福島にも行って自分の聞きたい質問をしっかりとできるようにしたい。宮城では今回見ることができなかった普通では入

ることのできない場所にも入ってより深くを見学し知りたい。
〇普通の見学では入ることのできない場所であったり、普段聞けない話を聞けてとても貴重な体験ができたと思います。宿では河北新報の方々から新聞社の話など　貴重な話を聞けた。やはり心にとても残ったのは、現地の人々の震災は終わってないという言葉でこの話を家族にすることで現地の人の思いを家に持ってきて伝えることができました。
〇全体の印象としては、学年を超えて震災という１つのテーマについて考え、話し合い、共に現地で合宿をし、とても良い雰囲気・環境の中で学ぶことが出来たと思います。私自身、1・2 年生にはとても刺激を受けました。このような積極的な取り組みやプロジェクトが継続されて行くことによって、益々政治学科が盛り上がっていくのではないかと思いました。それもこれも 3 人の先生方や現地の新聞社の方々のおかげであると思います。本当に有難うございました。今後ともよろしくお願いします。
〇全体としては本当に有意義だったし勉強になったというイメージが強かった。どうしてもハードスケジュールでそれぞれの視察先でもっと話聞きたいなと思うところもあったがそれ以上に福島民友、河北新報両社の協力に感謝したいとも思った。

プロジェクトを終えて（次年度へ向けて）

2017 年 2 月の視察を終え、東北プログラムを急遽アクティブ・ラーニングのプログラムに加えることになり、手探りを繰り返しながらプログラムを実施し、無事終えることができた。これは、福島民友社様、河北新報社様のおかげによるところが大きいことは言うまでもない。改めてこの場を借りて御礼を述べたい。

被災地に学生を連れて行き、現地を観察し、そこで自らの思考をめぐらせるという試みは、まさに「実社会を素材にした主体的な学び」であり、学生の報告者や感想からは当初の目的が大いに達成できたのではないかと思える。プログラムに参加して人生観が変わった学生や毎日の生き方が変わった学生もおり、そのターニング・ポイントが大東文化大学での学びであったということが、大きな成果であったと思える。

ところで、今回の東北プロジェクトは、まさに試行錯誤で実施したものであった。結果的に福島と宮城を 2 泊 3 日で回るという強行スケジュールとなり、参加した学生からも「ゆっくりと見たかった」という声を頂くことになった。しかしながら、開催日程調整、先方様との受け入れ体制の調整、参加学生の費用負担等を考えると、現在のアクティブ・ラーニングの実施体制では即座に改善することは非常に難しい状況であると言える。多くの皆様からの助言などをいただきながら、時間をかけて改善策を検討していきたい。

今回のプロジェクトの実施にあたり、かなりの事前学習を行った。東北の現地を見る目をしっかりと持ってもらうという趣旨で、木曜日の 6 限目に東松山キャンパスで事前学習会を開催した。そこでは、図書館職員にも協力を頂き資料の検索による事前学習、風評被害についての調査、放射能についての学習等を行って対策していったが、参加学生にとっても、それを運営してく教員側にとってもかなりの負担であった。参加学生については、半期 2 単位に相当するぐらいの学習量であったと思えるが、単位にならなくても興味のある問題について調べていくという姿勢で臨んで頂けた。大変頼もしいものがあったが、やはり学習したことを形に残せるようにできればと思える。また、運営した教員についても、専門外の知識を扱うため追加で事前準備が必要となり、かなりの負担になるものであった。全て研究時間を削って奉仕する形になるのであるが、今後も手広くアクティブ・ラーニングを行うのであれば、抱え込めないほどの負担が教員にかかることになり、いつまでもボランティアで運営していくには限界があるように思えた。

今後はしっかりとした事前指導ができる教員をつけ、単位を付与できるような仕組みで運営されることが望ましいと思える。政治学科のみならず全学の学生にこの東北プログラムを開放し、最上級の教育コンテンツを主体的に学んでいける機会を提供していくことを考えていくべきであると思える。

ともあれ、初めての東北プログラムは概ね大成功に終えることができたと思える。2018 年度も学長プロジェクトでの補助金を頂くことができたので継続して実施していくが、今年度の反省点を可能な限り改善し、さらに良い運営方法の可能性を探りながら行っていきたく思っている。

政治学科　藤井誠一郎